

●巻頭のことば●

医療従事者のライフステージと患者の葛藤

私は大学院で精神衛生を学ぶとともに精神分析指向的な精神療法も学んで、患者の心の奥にあるものと治療者の心とが影響を及ぼしあうという事象に深く関心をもっていた。治療者の一個の人間としてのライフステージと、患者の精神療法プロセスとの関連についても、同じ文脈から関心を持っている。昨今は“Person of the Therapist(POTT)”という概念もあるらしい。精神療法を生業としている公認心理師や精神科医でなくても、看護師を初めとして継続的な心身のケアを通じて患者と関わる立場の者は、患者からの転移(親をはじめとする自分の人生に大きな影響を与えた相手に対する感情を治療者やケア者に向けること)を向けられやすい。

私がまず注目したのは、治療者の妊娠期である。この時期は、娘から母親へ、ケアされる者からケアする者への、心理社会的成長・発達が生じやすいと同時に、非常に傷つきやすい時期でもある。私は治療者として、主に米国からの先行研究でこのことを学んだ後に、個人としてこの時期を経験した。性愛的な母親転移に向けた男性患者の事例もあったが、児童・思春期患者では、同胞と競って母親の愛情を求める同胞葛藤が顕在化する事例が多かった。

安心安全との絡みで言えば、思春期の女性患者は、「赤ちゃんって気持ち悪い」などの言葉で妹に対する葛藤を表現したので、私はおなかの赤ちゃんが攻撃されているように感じた。また思春期の男性患者は、「先生は子どもを調べるふりをして、病院の赤ちゃんを食べている」と鬼子母神のようなイメージで私を表現した。一方プレイセラピーを行っていた学童期の男子患者は、「カーテンの陰に誰がいる」と第三者の存在を表現し、私のおなかをめがけてライフル銃を撃ったり、ボールを投げつけたりして、攻撃がエスカレートした。スーパーバイザーから、私が産休を取ることで患者に申し訳ないと感じているのではないかと指摘されてハッとし、「その遊びは危ないからやめて」と患者に言えるようになったところで、エスカレートはストップしたのだった。

こういう知識を管理者がもっていることで医療従事者の安全が保証され、また医療従事者が知っていることで、自身が傷つかずにすむ。さらには、ここで患者の葛藤として扱うことができれば、患者自身に気づきが得られ、すっと回復が得られることも実証された。今号から『医療従事者が安心して健康に働くために』の連載がスタートした。毎号を楽しみにしていただきたい。

一般社団法人子どもと家族のQOL研究センター代表理事 上別府圭子

無断転載禁止